

第4章 少女マンガから見た『GIRL』 ——その日本での受容を左右するメディアスケープと民族性表現 ジャクリース・ベルント

はじめに

日本マンガの世界的普及で、少女マンガが重要な役割を果たしているのは周知のとおりである。それを認識している女性たちは、少女マンガの越境力を普遍的な「ガール・パワー」へと還元してしまう傾向が目につく。しかし、近年明らかになってきたように、少女マンガとガール・パワーの相互関係はそれほど普遍的でもない。例えば、以下の3点は両者の直結を相対化させるだろう。

まず第1に、「ガール・パワー」は、元来、女の子が消費者として持つ経済力というよりは、その消費活動などを通して家父長制的ジェンダー観を疑問視したり覆したりする批評力を意識させる用語である。ただし、近年グローバル化している少女マンガのパワーは、必ずしも批評的ジェンダー表象に基づくとはいえない。多くの読者はそもそも、特定の物語内容によって女性の主体性を自覚させる作品よりも、ジャンルの約束事によって遊ぶことができる娯楽メディアを求めている。つまり、少女マンガが現在、世界的規模で発揮しているパワーは、当然ながら、女性作家と女性読者が共有する物語に裏付けられてはいるが、その物語は普遍的なガール・パワーだけでなく、ポピュラーな「ジャンル」としての心理的・文化的・商業的有用性のためにも幅広く受容されているという側面は看過できない。

第2に、日本国内と海外とでは状況が異なることが挙げられる。特に北アメリカでは少女マンガをフェミニズムと関連付ける女性のファン評論家が少なくない。⁽²⁾ その関連で、徳雅美がもともとアメリカのために企画した「Shojo Manga! Girl Power!」展（2005年—）が日本に輸入された際、「少女

マンガパワー！」と改題されたことは注目に値する。日本での展覧会タイトルをわかりやすいものにした結果として、焦点が「少女マンガ」を保持したまま、「ガール・パワー」から「少女マンガのパワー」へと移ったからである。⁽³⁾ 意識的であれ無意識的であれ、日本での展覧会タイトルに現れているのは、ガール・パワーを保証するものを特定のマンガ・ジャンルに求めるという認識にほかならない。この認識がどれほど根強いかについては、日本マンガ・スタイルを採用しない女の子向けのマンガを想起すればいい。それは、少女マンガ式のガール・パワーには必ずしも含まれないからだ。

第3に、少女マンガにジェンダー批評的なポテンシャルを認めたとしても、少女マンガ論は、少なくとも日本国内ではジェンダーという観点を優先していて、(貧富の差を含む)⁽⁴⁾ 「階級」と「人種・民族性」といった、カルチュラル・スタディーズでの三位一体を完成させるはずの要素は無視する傾向が著しい。セクシュアリティーと友情、母と娘の関係などのテーマを追究し、さらに女性作家の発表の場としての商業誌と同人誌について論じた日本マンガ学会第10回大会でのパネルディスカッション「〈女子〉が読んだゼロ年代」⁽⁵⁾は、その一例である。

本章では、少女マンガとガール・パワーをめぐる常識を揺るがすために、ジャンルとしての少女マンガがいかにガール・パワーを促進するかではなく、むしろ、自明視されがちなその普遍性をいかに限定するかについて、論考する。具体例として2008年に北アメリカで刊行されその1年後に和訳出版されたジュリアン・タマキ画、マリコ・タマキ作の『GIRL』⁽⁶⁾を取り上げながら、ガール・パワーの発現を左右するメディア環境を浮き彫りにする。また、日本での『GIRL』の受容を限定する要素として、メディアスケープに加え、日系カナダ人である主人公の民族性表現に着眼し、比較対照として少女マンガのキャラクターに見いだされる人種横断性（あるいは白人志向）について言及する。さらに、英語原作とその和訳版の比較をもって、出版形態と表象内容が表現形式と不可分な関係にあるという、マンガ全般に当てはまる側面にも焦点を当てる。上記のパネルディスカッションのように表象テーマ論とメディア論を重視するだけでなく、表現論をも考慮に入れることによって、一見して馴染みがないマンガ作品を面白く読む可能性を示してみたい。

1 女の子の物語としての『GIRL』

本章が取り上げる『GIRL』は、従姉妹同士であるライターのマリコ・タマキ (Mariko Tamaki)⁽⁷⁾ と、イラストレーターのジュリアン・タマキ (Jillian Tamaki) によって、『SKIM』⁽⁸⁾ というタイトルでカナダで2008年に出版された。1993年のトロント市郊外を舞台とするこの物語は、16歳の女の子スキムが秋から冬にかけて書き続ける日記の形をとっている。138ページ、3部からなる英語原作に対し、和訳版は6章に再構成され、さらに、第1章と第2章、また第5章と第6章の間に2ページずつ、計4枚の黒いページを挿入することによって、総数が142ページに増えている（表1）。以下、引用は後者の和訳版による。

さて、英語原作と和訳版の相違やそれがもたらす効果に触れる前に、物語内容を確認しておこう。

主人公のスキムは、離婚した母とともに暮らし、たまに父とその新しいパートナーの家を訪れるが、「16歳は最低の存在だ！」（109ページ）という絶叫が示唆するように、深い疎外感を覚えながら女子高に通い、平凡な毎日を送っている。最初は、親友リサと一緒に魔女宗の世界に接触してみたり、新しい女性の国語教師アーチャー先生との付き合いに「別世界」を求めたりし、レズビアン的なキス・シーンさえ夢想するようになる（46—47ページ）。やがてアーチャー先生は他校に転任するが、スキムは新しい親友のケイティと遊びながら、自らのうつを乗り越え、金髪で美人の同級生たちによる同調圧力に対して距離をとるようになる（140ページ）。この力の獲得を象徴するのは、12ページからスキムの属性として現れ、131ページで取り外される右腕のギブスである。そのギブスは、114ページ以降は、スキムとケイティの共感を暗示するようになる。⁽⁹⁾ いちばん最後の見開き（150—151ページ）でスキムはケイティに付いて森に向かう。ジュリアン・タマキの前作と同様に、ここでも森は変化、そして新しい出発の可能性を暗示する場として描かれるが、2人の女の子がそのなかで恋人同士として結ばれるかは明示されずに、物語は終幕を迎える。

同性愛は疑いもなくこの青春物語の主題の1つである。ケイティの彼氏ジ

表1 章の構成

『SKIM』(2008年)		『GIRL』(2009年)	
1 Fall	36ページ	1 霧霜の秋さり来れば	15ページ
			2黒ページ
		2 虹色の魔女	21ページ
2 No rest for the wicked	48ページ	3 不道徳な人物に休日は訪れない	26ページ
		4 青春の抗うつ剤	22ページ
3 Goodbye (Hello)	53 +1ページ	5 雪の降る街を	33ページ
			2黒ページ
		6 グッドバイ&ハロー	20 +1ページ
	138ページ		142ページ

ヨンの自殺（27ページ）はスキムとその同級生たちを動搖させるが、学校で慰靈のセレモニーが開かれる日に、「彼はバレーボール部のスターだったが本当は同性愛者」（100ページ）という噂が広まり始める。ただし、本作での同性愛は、様々な他者性を代表する役割をも果たしている。この作品には人種的他者性という主題を見いだすことも可能であり、それは特に多民族文化の北アメリカでは珍しくない。スキムの本名は「キムバリー・ケイコ・キャメロン」⁽¹²⁾ という。その外貌が初めて登場する11ページで「ケイコ」というミドルネームが明らかになり、スキムは日系人だとわかる。しかしスキム自身は日系人であることを重視していない。日記でそれについて言及するのは一度だけであり、13歳の頃、ベトナム人養子のヘイン・ワショウスキーとともに金髪のバレリーナたちの誕生日パーティーから異物として追い出された回想エピソードとして記されている（89—92ページ）。

少女マンガの長い伝統を持つ日本では、本作は少女ものとして分類されやすい。それは、女の子である主人公の視点から展開される女の子についての、ジェンダーやセクシュアリティーをめぐる物語を提供しているだけでなく、『SKIM』という原題が和訳版では普通名詞の『GIRL』に改題されたためでもある。原作者の合意を得たうえで、編集担当者の永井肇は日本人にとって必ずしも身近でない主人公のあだ名スキムを、わかりやすい「GIRL」に変更したという。⁽¹³⁾ カタカナではなくアルファベットの表記にすることで、「少女」には直結しないが、日本特有のメディアスケープにあっては少女マンガとの関連付けは避けられないだろう。

担当編集者である永井は本作を「国が変わっても悩むことは一緒だよ」と



図1 サンクチュアリ出版による和訳版単行本（左）と、グラウンドウッド社が刊行したハードカバー本の英語原作

いう普遍的な物語として位置付け、この物語がある特定のマンガ・ジャンルに固執せずに幅広い読者層に届けようとし、原作の体裁を日本国内のメディアスケープに引き寄せるなどの努力を惜しまなかつたのである。

まず第1に出版形態を、カナダのグラウンドウッド社が刊行したハードカバー本（縦26センチ×横18センチ）から、帯付きのソフトカバー単行本（縦18.8センチ×横12.7センチ）へと変え⁽¹⁶⁾（図1）、価格を海外マンガの翻訳版としては例外的な800円という安値にした。第2に、原作では日記形式に合うよう採用されたフリーハンド風の書体を、日本マンガ式の写植と入れ替える工夫をした。ところが、本のサイズが縮小されたために必要となつたと思われる手書きに代わる写植は、本作の表現に意味的変化をもたらす結果にもなつた。例えば、英語原作で文字に施された「取り消し線」は、日記を書いていた主人公の迷いを表現していたのだが、和訳版ではそれを再現しなかつた。⁽¹⁸⁾また、紙面上での文字配置が変わることによって、その配置自体が示唆する意味が失われてしまうこともある。例えば、スキムの机の上にある額縁付きの写真には幸せなカップルだった頃の両親が写っているが、原作では写真の左下に母による父についてのコメント、そして右下に父による母についての



図2 英語原作10ページ（左）、和訳版14ページ

コメントが、それぞれ3行からなる文として配置されていることによって、空間的距離を通して離婚前と離婚後の状況を同時に読者に感じ取らせる（英語版：10ページ上半；図2）。しかし、和訳版（14ページ）では、左右に配置されていたものが上下へと変えられただけでなく、行数の面でも言語表現の面でも原作の左右対称性が崩れてしまつていて⁽¹⁹⁾いる。その他にも、コマ（あるいはコマ枠線がない）画像に書き込まれている言葉が日本語脚注を伴つたり、あるいは和訳せずに残されてたりすることも、挙げられる。⁽²⁰⁾⁽²¹⁾

編集担当の努力を費やした工夫が画期的なのは疑いない。しかし、「SKIM」の和訳版は残念ながら商業的には成功せず、最初の3年間で発行部数の7分の1しか売れなかつたようだ。⁽²²⁾コストの関係から原作のまま、日本式の右開きでないことも、日本の読者にとっては高いハードルとなる。しかし、それ以上に大きな要因は、出版形態と和訳題名が少女マンガを期待させるのに対し、実際には、内容はそれから逸脱していくことがある。

2 メディアスケープによる受容限定

日本国内の巨大なマンガ市場で無名の作家を成功させるには、出版の場や

ジャンルによる丁寧なコンテクスト化が不可欠である。その際、マンガ雑誌での連載が最も効果的であることはいうまでもないだろう。しかし、『GIRL』はマンガ出版社としてあまり有名でないサンクチュアリ出版を版元とし、また、雑誌連載をせずに単行本の描き下ろしとして出版されている。マンガとして認識されにくいのには表紙デザインも関係しているかもしれない。表紙イメージには、スキムがアーチャー先生とキスしている見開きのページ(46—47ページ)が(左右のページを逆にした形で)採用されているが、もともとモノクロであるこの図版に赤の色味をつけている。赤色自体は、描かれているカップルとともに、女性特有の物語空間をほのめかすが、フルカラーのイラストではないという点でマンガ本よりも小説をイメージさせる。ただ、この表紙の表現形式こそ描き下ろし作品、あるいは小説に引けをとらないグラフィック・ノベルとしてはふさわしいともいえる。

近年、グラフィック・ノベルという名称は、文学に劣らず複雑で信憑性の高い長篇物語という規範的な意味合いが希薄になり、小冊子やマンガ誌ではなくむしろ100ページ以上の単行本という单なる出版形態と見なされるようになった。ところが、狭義のグラフィック・ノベルは、近代的意味での「作者」によって克明に構想された結果、自己完結した作品として読者の手に届き、その表現上の必然性ゆえに、細部に至るまで注目に値し有意義的であると思われる長篇物語マンガを指す。『SKIM』はまさにこの意味でのグラフィック・ノベルといえるだろう。それは、深読みを誘う丁寧な物語構成や、記号性が低いキャラクター造形に加え、日本マンガを含むポピュラーなメディア文化を敬遠していることからもうかがえる。

確かに、『SKIM/GIRL』の物語時間は北アメリカにマンガ・ブームが訪れる前に設定されていて、スキムの世界にはインターネットも携帯電話も存在しない。しかし、作家が日本マンガに対して意図的に距離を置いている感も否めない。1980年前後生まれのジュリアン・タマキに、日本マンガとの接觸が全くなかったはずはないが、子どもの頃どのマンガを読んだかという質問に、タマキは女の子向けの『Archie(アーチー)』を挙げ、大学時代には、グラフィック・ノベルの先駆者、ウィル・アイズナー(Will Eisner)をはじめ、セス(Seth)やチェスター・ブラウン(Chester Brown)、ダニエル・クロウズ(Daniel Clowes)、エドリアン・トミーネ(Adrian Tomine)といったオールタナティブな作家に刺激を受けたと述べている。そのことか

らも、タマキが作画したマンガは、少女マンガではなく、むしろジャンル的約束とは縁がないグラフィック・ノベルとして読むことが妥当だと思われる。

しかし、『GIRL』には少女マンガと近似した側面もある。ストーリーや単色印刷の他に、必ずしも表象的でない花と落葉、星の描き込み、そして内語の多用、コマとページの相互関係、さらに読者の視線誘導にそれが見受けられる。

周知のとおり、少女マンガは、1970年代以降、ますます複雑な内面世界を描き始め、吹き出しの外の文字情報や、物語世界内に実存しない花々からなる背景、3段ぶちぬきのスタイル画を含む重層的なページデザインなどに特徴付けられるようになる。伊藤剛はこの表現上の特徴を「フレームの不確定性」と名付けて理論化してきた。それによると、少女マンガは、少年マンガや劇画、青年マンガとは対照的に、読者が個別のコマ、あるいは見開き全体を「視界」としてとらえるべきかをめぐる迷いを抑えたのではなく、むしろ読者の想像的参加を招くように、コマとページ(あるいは見開き)の曖昧な関係を活かしてきたのである。『GIRL』も読者に視覚的ズームイン・ズームアウトを求めながら、コマ展開の追求とページ全体を見渡す作業を繰り返させる。各コマとその他の要素を統合するのは、主人公のクローズアップ、特に少女マンガらしい大きな瞳ではなく、「下地」としての紙面という空間だが、しかし、「男性的」といえる格子状の規則的なコマ割りとの相違と、ページをめくらせる見開き上の(左上から右下への)視線の流れといった点ではきわめて「女性的」な表現に見える。

言語表現についてはどうだろう。本作は、少女マンガの内語を想起させる文字情報が多く、吹き出し内のセリフとほぼ対等の量をなす。ただし、英語原作では、過去形の日記文と(特に学校の場面での)現在形の内的コメントが共存するのに対し、和訳版はその区別をぼやかしてしまった。それは手書きに代わる写植(しかもすべて同じ書体)のためだけではない。原作で主人公は37回も「Dear Diary」という言葉をもって自らの日記との対話に入るが、和訳版はそれを省いているがゆえに、日記形式の存在感が希薄になり、それによる徹底的主観性を見逃しやすい。一人称と三人称の移り変わりに関する、少女マンガの言語的・視覚的諸手法という側面からも本作は分析に値するが、それは次の機会に譲り、ここでは論点を1点だけ挙げておきたい。

本作が問題にするのは、近年の少女マンガが促すキャラクターの外貌をめ

ぐる流動的アイデンティティーとも異なっている。それは、例えば、スキムの髪の色に見られる。スキムは、一貫して「金髪」の同級生と見分けやすい黒髪の人物として登場し続ける。脱色剤を使用して(134—135ページ)一時的に「金髪」となるが、それさえもかえって黒髪の真性を強調することになる。同様に、黒ベタの紙面は、回想を示唆するのではなく、夜を表象したり、サブカルチャー的「闇」を暗示している。何よりも、少女マンガと一線を画す要素としては、主人公の「不細工な」外貌が挙げられるが、それが意味する問題を次節で詳しく論じたい。

3 キャラクター造形と民族性表現

原作者の意図は人種問題を描くことではない。⁽³⁴⁾しかし、主人公のキャラクター造形、特にその顔立ちには、「日本」という民族性が明らかに強調されている。とはいっても、民族性を際立たせているのは英語原作のほうである。原作ではスキムの顔が表紙イラストに採用されているのに対し、和訳版では、最初の3分の1まででは彼女の顔は割合に小さなコマでしか確認できない。なお、小さなコマに描かれているとはいっても、スキムの切れ長の目や寸胴の体型は、感情移入を妨げるほど、アジア人らしさを感じさせる。

ところが、本作は民族性を、キャラクター造形における具体的な表象に限らず、表現スタイルでも示唆している。スキムの顔を極端に切り取った形で見せる英語原作の表紙画像は、民族性を含むスキムの狭苦しい社会的地位を示唆しているが、目の形状だけでなく、構図と平面的な色づかい、鮮やかな線描といった要素自体もスキムの「日本人らしさ」を想起させるのである。本作中、彼女の顔は2回も能面に例えられる(54、79ページ)。しかし、歐米人の多くは中世日本の芸術ではなく、むしろ19世紀末、西洋美術にジャポニズムを引き起こした浮世絵木版画を連想してしまう。その一例はイギリスのマンガ批評家ポール・グラヴェット(Paul Gravett)による言及である。彼によると、スキムの肖像は歌川国芳が描いた繊細な美人画に類似し、浮世絵と現代日本マンガ、また本作との三角関係を認識させる。しかし、ジュリアン・タマキ自身は、制作にあたって浮世絵木版画を意識的に参照していないという。⁽³⁵⁾

なお、本作の表現とジャポニズムの接点は表紙に限らない。和訳版第3章の冒頭、50ページ2段の右コマにエドワール・マネの『オランピア』(1863年)⁽³⁶⁾が登場する(図3)。同ページのいちばん下の段を占めるトーン付きのコマは、夜眠れないスキムがベッドに横たわっているところを描写しているが、彼女の視線の先にある上の7コマには、美術教育の授業を含むその1日の断片的記憶が並べられている。この画像に、心臓の鼓動を表しているかのような黒い短棒が重なっていて、外的出来事から内的情動へと視点を移す。『オランピア』は前者の一部分にすぎないが、

構図的に黒人の下婢が当該コマの中央に据えられている(しかも、スキムがそれを見上げるかのように配置されている)ことは、人種問題を想起させる。

瞳が小さいスキムの顔は美貌の印象を与えない。興味深いことに、日本の読者だけでなく北アメリカの(マンガ・ファンでない)読者も彼女を「不細工」と見なす。ただし、かわいらしく見えないのは、本作に登場するすべての女子高生も同じである。金髪の人気者さえ、物語上、美人と位置付けられていても、決して美人として描かれてはいない。つまり、問題は人種の表象よりも、作者が読者に受け取ってほしいキャラクターに対する態度である。⁽⁴⁰⁾一見して美しいとは思えないスキムというお面は、読者が自らかぶることで物語世界に入り込むことができず、そのため彼女に自分の同類として接触することも、キャラとして所有することも困難になるのである。この徹底的他者性こそ、本作が「同化」を優先してきた大多数の少女マンガと一線を画し、⁽⁴¹⁾⁽⁴²⁾



図3 マネの『オランピア』が登場するページ

読者に違和感を覚えさせる一因だといえるだろう。

金髪の同級生と比べて民族的な他者に見えるスキム自身は、前述のとおり、民族性に関心を示さない。まさにこの点で少女マンガ読者と同様である。大友克洋の『AKIRA』⁽⁴³⁾ や浦沢直樹の『BILLY BAT』⁽⁴⁴⁾、かわぐちかいじの『イーグル』⁽⁴⁵⁾などの青年マンガは、白人と異なる日本人あるいは日系人のキャラクターを登場させるのに対し、少女マンガは「西洋化」への傾倒が強く、目が小さいアジア的な顔を採用する場合、それを主にする脇役のキャラクターに当てはめる。大城房美は少女マンガの特徴を「西洋化」と「女性化」⁽⁴⁶⁾に見いだし、それを「日本」と「男性性」の裏返しとして論考してきた。大城によると、少女マンガの要素である「西洋化」は、欧米の東洋趣味に相当する日本の西洋主義と同一視すべきではないという。19世紀末以降の日本での「西洋」、そして西洋化としての近代化は言説上、男性性を内含しているが、この男性的西洋を流用して「女性化」しながら、良妻賢母的な「女性性」に対しても距離を置くことこそ、少女マンガとそれをめぐる想像の共同体を特徴付けていると、大城は指摘している。ボーイズラブの作品に登場する美少年に至るまで「白人」のような外見をしたキャラクターは、1970年代以降、実際の欧米人の表象というより、近代日本での支配的ジェンダーを反面教師の形で体現したものであり、また、その過程でシニフィエのないシニフィアンへと変化したことは周知のことおりだろう。

少女マンガらしいキャラクター造形を「白人」と分類するか、それとも「無国籍」と見なすか、そして、前者を無意識的に脱政治的西洋主義として批判し、後者を文化横断性の名において歓迎するかについては、研究者の間でも意見が分かれる。大城は、少女マンガの草創期を研究対象とし、しかもその物語の舞台にも注目しているがゆえに、白人のように見えるものと、白人を指すものの区別をそれほど追求する必要がない。しかし、日本を舞台とする少女マンガや、海外の（白人でない）読者にとっても自己投影できるマンガ・キャラクターのはたらきを念頭に置いて、一体どの環境下で、そしてどの属性を基準にして、あるキャラクターを「白人」として分類するのかという問題が意識されるようになってきた。事実、世界中の日本マンガ・ファンは、人種が物語設定や言語表現、外貌描写によって標示されないかぎり、「白人」として映るかもしれないキャラクターを、自分が帰属する民族的過半数の一員と見なし、それに自らの人種を投影するのである。⁽⁴⁸⁾

なお、「無国籍」なマンガ・キャラクターに人種的属性を読み込ませることは、いうまでもなくマンガ・リテラシーの有無の他に、社会環境に左右される。例えば、日本産でない「グローバル・マンガ」の代表作であるスヴェトラナ・クマコヴァ (Svetlana Chmakova) の『ドラマコン』では、主人公の1人、ベサニーの肌には黒人を示唆するトーンがかかっている。『ドラマコン』についての英語版「ウィキペディア」記事がそのことに一切言及していないことからも、異文化間の「記号的ギャップ」はおのずと明確になる。⁽⁴⁹⁾ 日本のマンガとその評論・研究も、北アメリカの学界と縁がないかぎり、人種問題には触れない。だからといって、日本のメディアスケープに人種問題が存在しないということにはならない。『GIRL』の受容は、民族性をめぐる観念が存在していること、少女マンガ文化が必ずしも脱人種的空間でないことを示唆しているのではないだろうか。換言すると、少女マンガには既存の性別と人種を突破するポテンシャルが認められるものの、人種をもって他人化を促す場合もある。ただし、どちらに傾くかを考慮するにあたっては、方法論的な工夫が求められる。表象内容やその解読に固執するだけでなく、表現技法上の要因、および読者による「キャラ」や「世界」への情動的な関わり方をも重視する必要がある。まさに、指示対象と表象主義への傾倒を相対化するために、トーマス・ラマール (Thomas LaMarre) は、日本アニメとマンガのキャラクターについて「人種」ではなく「種族」という、「人種」ほど隔離的でない概念の使用を勧めているのである。また、エッラ・ショート (Ella Shohat) も人種に対する表象主義的切り口を疑問視し、ステレオタイプがもたらしうる差別の批判と同時に、ジャンルによる約束と表現上の特性、さらに制作者と観客・読者の社会的位置付けを重視すべきであるという。⁽⁵⁰⁾

それを『GIRL』の受容に適用すると、スキムの顔に対する違和感は、それを特定の人種・民族性へと還元する表象的読みに由来する、と結論付けられる。そもそも表象志向自体は、近年のマンガ読者にとっては違和感をもたらしやすいといえる。彼らは深読みよりも、二次創作やコスプレまでいかなくても、パロディーなどの間テクスト性に耽溺する傾向が強くなっているからである。スキムの顔は、記号性が高い「普通」のキャラクターほど共有しやすくなく、日本マンガ読者にとっては「日本的すぎる」といっても過言ではない。まさにそういう他者こそ、少女マンガにとっての「他者」を考察さ

せることができるかもしれない。

注

- (1) 例えば、H. Dawn Currie, Deirdre M. Kelly and Shauna Pomerantz, 'Girl Power: Girls Inventing Girlhood, Peter Lang, 2009 を参照。
- (2) 例えば、Ann Lee, "Shojo Power! Feminist Analysis of Sailor Moon and More" (<http://shojopower.com>) [最終アクセス2013年10月10日] を参照。
- (3) 川崎市市民ミュージアム編「少女マンガパワー！——つよく・やさしく・うつくしく」川崎市市民ミュージアム、2008年
- (4) 「人種」と「民族性」の区別の詳細については本章では割愛する。
- (5) 藤本由香里（司会）、川原和子／福田里香／野中モモ（パネリスト）「シンポジウム 第1部〈女子〉が読んだゼロ年代」「マンガ研究」第17号、日本マンガ学会、2011年、136—178ページ
- (6) 「メディアスケープ」（アバデュライ・アルジュン『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』門田健一訳、平凡社、2004年）は、技術的・制度的意味でのメディア環境よりも、人々の想像力と密接に結び付いている「メディアの地景」に焦点を当てた用語であり、少女マンガの場合、その熱心な読者のリテラシーと受容・消費の慣習に裏付けられる「期待の地平」にも相当する。
- (7) タマキの知名度は『SKIM』以来ますます高まっている。例えば、2010年に初めて「ニューヨークタイムズ」誌で発表した「Domestic Men of Mystery」(2011年、192—193ページ)は『ベスト・アメリカン・コミックス 2011年版』(アリソン・ベクダル編)に収録され、この年鑑のカバーイラストもタマキが描いている。タマキ従姉妹の2冊目のグラフィック・ノベル『This One Summer』は2014年に出版された。
- (8) 英語版では、主人公が初めて画面に登場する8ページの右端に「Year: 1993」と記されているが、和訳版(11ページ)ではそれは消去されている。英語版89ページ(和: 95ページ)右下のコマに出てる新聞の紙面にも「1993」が確認できるが、和訳版は判型が縮小されているため、判読しにくい。
- (9) ケイティも左腕にギブスをしているのが、81ページ2段左コマですでに確認できる。
- (10) 2006年のデビュー作「The Tape Mines (カセットテープの鉱坑)」(Jillian

Tamaki『Gilded Lilies—Comics & Drawings』Conundrum Press、2009年)でも森は重要なモチーフである。全80ページのうち、6コマで形成されているページは2ページだけで、あとはすべて1ページ1カットか見開き1カットで描かれている。最初のタイトルと「It was/ a day like any other at the factory in the forest」という1行以外に言葉が使われていない。

- (11) 例えばMonica Chiu, "A Moment Outside of Time: The Visual Life of Homesetnality and Race in Tamaki and Tamaki's *Skim*," in Monica Chiu, ed., *Drawing New Color Lines: Transnational Asian American Graphic Narratives*, Hong Kong University Press, 2014.
- (12) マリコもジュリアンも日本語にはうとかったので、原作の短いバージョンを2005年に「Kiss Magazine」誌で発表した際、「タコタ (Takota)」という名字を採用したが、日本人よりもアメリカン・インディアンの一族を連想させるので『SKIM』では変えたという。“*Skim's last name was originally 'Takota', until we realized her Dad was White and probably wouldn't have the last name Takota. Which ended up not really being Japanese anyway (we googled and from what we could find, 'Takota' is maybe Sioux?). We are bad Japanese people.*” Judith Saltman, “Review *Skim*” (http://www.quillandquire.com/books_youth/review.cfm?review_id=5989) [最終アクセス2015年4月12日])も参照。Jillian Tamaki, blog entry, 7 October 2009. <http://blog.jilliantamaki.com/2009/10/skim-news-6/>
- (13) 日本の「少女」は、戦前からの女子向けメディアやそれをめぐる消費文化によって形成されてきた言説あるいは「地景」であるという点では、必ずしも英語のgirlの意味範囲と重なり合わないので、本章では「女の子」と区別して使用する。なお「女子」は、特定の読者集団、内語を多用する物語形式、さらに特殊なコマ構造と関連して「想像」されてきた従来の「少女マンガ」の解体を連想させる用語として、本章ではその使用を避ける。
- (14) 永井肇「筆者とのインタビュー」(東京のサンクチュアリ出版社で、2012年3月5日)。英語の形容詞skimは「泡沫的」「はかない」「夢幻」などを共示するが、永井がいう女の子の「切なさ」とも響き合う。
- (15) 同インタビュー
- (16) 同様に日系アメリカ人作家であるエドリアン・トミーネ(Adrian Tomine)の日本語版(『SLEEPWALK AND OTHER STORIES』山田祐史訳、プレスピップギャラリー、2003年[英語版は1998年])は、1,420円である。
- (17) これは、作家自作のフリー手帳風書体を特徴とするアリソン・ベクダル(Alison Bechdel)の和訳版(『ファン・ホーム——ある家族の悲喜劇』椎

名ゆかり訳、小学館集英社プロダクション、2011年)にも当てはまる。

- (18) 例えば、授業中、アーチャー先生に無視されたスキムが「私のほうはあまり見てくれなかった」という嘆きを日記に書いているが、その文をすぐに消したというニュアンスは和訳版では読者に伝わってこない(76ページ2段右; 英語版: 70ページ)。
- (19) 和訳では2行だけの母の文に対し、父の文は3行を占める。
- (20) 例えば、スキムのノートあるいは学校の掲示板(58ページ2段右、59ページ左下、英語版: 52—53ページ)を参照。
- (21) 例えば、スキムが雪に書き込む「I hate you everything」(95ページ)と同ページ右下コマ内の英語は和訳されていない。そのため、後者では、自殺した青年の写真の上に俗語の「fag」(男性の同性愛者)と書かれていることが見逃されやすい。
- (22) 前掲「筆者とのインタビュー」
- (23) サンクチュアリ出版は、「まんが」というジャンル名で2007年に同人誌「マンガとして初めて文化庁メディア芸術祭で奨励賞を受賞した白井弓子『天顯祭』([Sanctuary books. New comics]、2008年【とその英語訳[TENKEN]】)の他に、エッセイマンガや(フランスの作家ジョアン・スフアールによる)『星の王子さま——バンド・デシネ版』(池澤夏樹訳、2011年)などのコミックスを出版しているが、点数は10点に満たない。ちなみに、『GIRL』の編集担当者が、06年には小島アジコの『となりの801ちゃん』([Next comics]、宙出版)の単行本化に携わっていた。
- (24) ゼバスティアン・エーラー(Sebastian Oehler)「グラフィック・ノベルって何? ——ドイツと世界のコミック作品概観」(<http://www.goethe.de/kue/lit/prj/com/ccs/csz/ja5711244.htm>) [最終アクセス2013年10月10日]
- (25) “author”。日本のマンガ家は「作者」よりも「職人」としての自己像が強い。
- (26) 日本マンガの特徴の1つは記号性の高いキャラクターである。
- (27) 『SKIM/GIRL』は、ポピュラーなメディア文化を全く参照せず、パロディ要素もない。つまり、「文学志向」に映りやすい。
- (28) この点では、同様に日系北アメリカ人を主人公とするFred Chao (*Johnny Hiro: Half Asian, All Hero*, AdHouse Books, 2009)と対照的である。Shan Mu (Shannon) Zhaoによる論考("Claiming America Panel by Panel: Popular Culture in Asian American Comics," Paper 4393 [<http://digitalcommons.mcmaster.ca/opedissertations/4393>] [最終アクセス2013年10月10日])も参照。

- (29) 2003年に大学を卒業した後の一時期、エドモントン市のコンピュータゲーム開発会社バイウェアに勤めていたことがあるので、日本のポップカルチャーとも接触していたと思われる。
- (30) Chris Randle, "The Jillian Tamaki Interview," *The Comics Journal*, July 2011 (<http://www.tcj.com/the-jillian-tamaki-interview/>) [最終アクセス2013年10月10日]; Suzette Chan, "This Is the Story of Mariko Tamaki and Jillian Tamaki. So Read On: Jillian Tamaki and Mariko Tamaki," *Sequential Tart*, VIII(10), (http://www.sequentialtart.com/archive/oct05/art_1005_3.shtml) [最終アクセス2013年10月10日]。
- (31) 伊藤剛「マンガのふたつの顔」、東浩紀編『日本2.0』(「思想地図β」第3巻)所収、ゲンロン、2012年、236—483ページ
- (32) 原作全ページの4分の1以上にあたる。
- (33) 「身体離脱ショット」(泉信行『漫画をめくる冒險——読み方から見え方まで』上)[「PFPライブラリー」第1巻]、ピアノ・ファイア・パブリケーション、2008年)などを参照。
- (34) Frederik Luis Aldama, "Multicultural Comics Today: A Brief Introduction," in Frederik Luis Aldama, ed., *Multicultural Comics: From Zap to Blue Beetle*, University of Texas Press, 2010, pp. 8-9.
- (35) それと異なる2005年の『Kiss Magazine』別冊の表紙については、Chanの図版を参照。
- (36) 例えば、Saltman, op.cit. 日本の読者あるいは日本美術史に詳しい者は、『源氏物語絵巻』などの日本中世絵画、そしてそれを継承する近代日本画(例えば、上村松園『草紙洗小町』1937年)を連想するだろう。
- (37) Paul Gravett, "Manga at the Royal Academy: The Making of Manga Mania," posted March 22, 2009 (edited version in *The Royal Academy Magazine*, 102 [spring 2009]) (http://www.paulgravett.com/index.php/articles/article/manga_at_the_royal_academy/) [最終アクセス2013年10月10日]
- (38) 絵画的奥行きの抑制、画中空間の層化、左右非対称的構図、シェーディングの少ない色面、人体を囲む黒い輪郭線などの特徴から『オランピア』はジャポニズム的と見なされてきた。
- (39) 森村泰昌は『肖像(双子)』(1988—90年、カラー写真プリント)で、日本人男性である自らの肉体をもって、フランス人娼婦オランピアとその黒人の下婢に扮することで、印象派絵画をめぐる人種関係、また植民地主義および東洋趣味との関連で「女性」として想像されてきたアジアもしくは日本に焦点を当てた(例えば、Norman Bryson, "Three Morimura Readings," *Art +*

Text, 52, 1995, pp. 74—79 を参照)。

(40) Randle, "ugly," op.cit.

(41) スコット・マクラウド「仮面効果」(『マンガ学——マンガによるマンガのためのマンガ理論』岡田斗司夫監訳、美術出版社、1998年)を参照。

(42) 足立典子「これは仮定だけど、そんなときはぼく——少女マンガと同性愛」(熊倉敬聰／千野香織編『女?日本?美?——新たなジェンダー批評に向けて』所収、慶應義塾大学出版会、1999年、197—220ページ)を参照。

(43) 大友克洋『AKIRA』全6巻(KC deluxe)、講談社、1984—93年(英語訳: *AKIRA*, 6 volumes, Dark Horse, 2000-02)。

(44) 浦沢直樹『BILLY BAT』既刊15巻(モーニングKC)、講談社、2008年—

(45) アメリカ多民族文学学会誌『*Melus*』に掲載されたかわぐちかいじ『イーグル』(全11巻[ビッグコミックス]、小学館、1998—2001年[英語訳: *Eagle: The Making of an Asian-American President*, 5 volumes, Viz Media, 1997—2001])批評では、脱人種化による主人公の「普遍」的描写と対をなす女性キャラクターの「民族化」が指摘されている(Betsy Huang, "The Making of an Asian American President by Kaiji Kawaguchi Review," *MELUS* 32 (3), 2007, p. 287)。

(46) 大城房美「少女マンガと「西洋」——少女マンガにおける「日本」の不在と西洋的イメージの氾濫について」、筑波大学文化批評研究会編『〈翻訳〉の圈域——文化・植民地・アイデンティティ』イセブ、2004年、525—554ページ

(47) Terry Kawashimaは、キャラクターが、複数の人種に属するような要素を組み合わせているのに、その一部分だけに焦点を当てながら人種論を展開する慣習を指摘している("Sailor Moon looks as 'Japanese' as she looks 'white': 'Seeing Faces, Making Races: Challenging Visual Tropes of Racial Difference,'" *Meridians: feminisms, race, transnationalism*, 3 (1), 2002, p. 161)。

(48) Ibid., p. 165. "... race must be marked in manga ...; otherwise, readers will be inclined to see them [the characters] as members of the unmarked majority" (Casey Brienza, "Beyond b&w? The global manga of Felipe Smith," in Howard C. Sheena and Ronald L. Jackson II eds, *Black Comics: Politics of Race and Representation*, Bloomsbury Academic, 2013, p. 83).

(49) Wikipedia, "Dramacon" (<http://en.wikipedia.org/wiki/Dramacon>)[最終アクセス2013年10月10日]。

(50) 北アメリカの文化人類学者 Takamori がソウルのメカデミア会議でおこなった、少女マンガとは直接関係のない問題提起による(Ayako Takamori,

"The Cute Savage: Global Afterlives and Semiotics of American Racism," paper delivered at the 3rd *Mechademia Conference on Anime, Manga and Media Theory from Japan*, Dongguk University Seoul, November 29, 2012)。

(51) 例えば、大城の他に長池一美("Elegant Caucasians, Amorous Arabs, and Invisible Others: Signs and Images of Foreigners in Japanese BL Manga," *Intersections: Gender and Sexuality in Asia and the Pacific*, 20, 2009 [<http://intersections.anu.edu.au/issue20/nagaike.htm>] [最終アクセス 2013年10月10日])が挙げられる。

(52) アントノノカの考察 ("Blonde is the new Japanese: Transcending race in shōjo manga," *INVENE Échanges entre Orient et Occident*, vol.1 ed. by Geoffrey Cognet and Marco Pellitteri, tours, 2013, pp.71-92 [<http://invene.blogspot.jp/>]、2014年春)による。Nagaike, op.cit. も参照。

(53) 例えば、少女マンガらしい大きな瞳を「心の鏡」あるいは「白人への憧れ」と見なすのは表象論的な解説だが、前述のコマ構成論(伊藤剛)、つまり見開き上の断片的な視覚情報を統合させるその役割も、同様に注目すべきである。

(54) Speciesism: "a displacement of race and racism (relations between humans as imagined in racial terms) onto relations between humans and animals ... and vice versa" (Thomas LaMarre, "Speciesism, Part I: Translating Races into Animals in Wartime Animation," *Mechademia 3: Limits of the Human*, 2008, p. 76); "... a movement away from referential and representational strategies. ... Thus we return to the problematic of cute little nonhuman species, not merely as allegorical accounts of Japan or the United States but as biopolitical operations." (Thomas LaMarre, "Speciesism, Part II: Tezuka Osamu and the Multispecies Ideal," *Mechademia 5: Fanthropologies*, 2010, p. 77).

(55) Ella Shohat, "Stereotype, Representation, and the Question of the Real: Some Methodological Proposals," in Yasuko Takezawa, ed., *Racial Representations in Asia*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2011, p. 23, p. 26.

文献一覧

・参考文献 [ABC順]

足立典子「これは仮定だけど、そんなときはぼく——少女マンガと同性愛」、熊倉敬聰／千野香織編『女?日本?美?——新たなジェンダー批評に向けて』所収、慶應義塾大学出版会、1999年、197—220ページ

Aldama, Frederik Luis, "Multicultural Comics Today: A Brief Introduction,"

- Multicultural Comics: From Zap to Blue Beetle*, edited by Frederik Luis Aldama, University of Texas Press, 2010, pp.1-25.
- Antononoka, Olga, "Blonde is the new Japanese: Transcending race in shōjo manga," *INVENE Échanges entre Orient et Occident*, vol.1, edited by Geoffrey Cognet and Marco Pellitteri, tours, 2013, pp.71-92.
- アパデュライ、アルジュン『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』門田 健一訳、平凡社、2004年
- Berndt, Jacqueline, "SKIM as GIRL: Reading a Japanese American Graphic Novel through Manga Lenses," in Monica Chiu, ed., *Drawing New Color Lines: Transnational Asian American Graphic Narratives*, Hong Kong University Press, 2014, pp. 257-278.
- Brienza, Casey, "Beyond b&w? The global manga of Felipe Smith," in Howard C. Sheena and Ronald L. Jackson II, eds., *Black Comics: Politics of Race and Representation*, Bloomsbury Academic, 2013, pp.79-94.
- Bryson, Norman, "Three Morimura Readings," *Art + Text*, 52 (1995), pp. 74-79.
- Chan, Suzette, "This Is the Story of Mariko Tamaki and Jillian Tamaki. So Read On Jillian Tamaki and Mariko Tamaki," *Sequential Tart*, vol. VIII, issue 10, (http://www.sequentialart.com/archive/oct05/art_1005_3.shtml) [最終アクセス2013年10月10日]
- Chiu, Monica, "A Moment Outside of Time: The visual Life of Homesetnarity and Race in Tamaki and Tamaki's *Skim*," in Monica Chiu, ed., *Drawing New Color Lines: Transnational Asian American Graphic Narratives*, Hong Kong University Press, 2014, pp.27-48.
- Currie, Dawn H.; Deirdre M. Kelly and Shauna Pomerantz, 'Girl Power': Girls Inventing Girlhood, Peter Lang, 2009.
- 藤本由香里（司会）、川原和子／福田里香／野中モモ（パネリスト）「シンポジウム 第1部〈女子〉が読んだゼロ年代」「マンガ研究」第17号、日本マンガ学会、2011年、136—178ページ
- Gardner, Jared, "Same Difference: Graphic Alterity in the Work of Gene Luen Yang, Adrian Tomine, and Derek Kirk Kim," in Frederik Luis Aldama, ed., *Multicultural Comics: From Zap to Blue Beetle*, University of Texas Press, 2001, pp. 132-147.
- Gravett, Paul, "Manga at the Royal Academy: The Making of Manga Mania," Posted March 22, 2009 (edited version in *The Royal Academy Magazine*, 102 [spring 2009]) (http://www.paulgravett.com/index.php/articles/article/manga_at_the_royal_academy/) [最終アクセス2013年10月10日]
- Huang, Betsy, "The Making of an Asian American President," *MELUS* 32(3), 2007, pp. 283-287.
- 伊藤剛「マンガのふたつの顔」、東浩紀編『日本2・0』〔「思想地図β」第3巻〕所収、ゲンロン、2012年、236—483ページ
- 泉信行『漫画をめくる冒険——読み方から見え方まで』上（〔PFP ライブリーアー〕第1巻）、ピアノ・ファイア・パブリケーション、2008年
- 川崎市市民ミュージアム編（ヤマダトモコ・金澤韻編）『少女マンガパワー！——つよく・やさしく・うつくしく』川崎市市民ミュージアム、2008年
- Kawashima, Terry, "Seeing Faces, Making Races: Challenging Visual Tropes of Racial Difference," *Meridians: feminisms, race, transnationalism*, 3(1), 2002, pp. 161-190.
- LaMarre, Thomas, "Speciesism, Part I: Translating Races into Animals in Wartime Animation," *Mechademia 3: Limits of the Human*, 2008, pp. 75-95.
- "Speciesism, Part II: Tezuka Osamu and the Multispecies Ideal," *Mechademia 5: Fanthropologies*, 2010, pp. 51-86.
- "Speciesism, Part III: Neoteny and the Politics of Life," *Mechademia 6: User Enhanced*, 2011, pp. 110-136.
- Lee, Ann, "Shojo Power! Feminist Analysis of Sailor Moon and More," (<http://shojopower.com>) [最終アクセス2013年10月10日]
- マクラウド、スコット『マンガ学——マンガによるマンガのためのマンガ理論』岡田斗司夫監訳、美術出版社、1998年
- 永井肇「J・ベルントとのインタビュー」（東京のサンクチュアリ出版社で、2012年3月5日）
- 長池一美・Nagaike, Kazumi, "Elegant Caucasians, Amorous Arabs, and Invisible Others: Signs and Images of Foreigners in Japanese BL Manga," *Intersections: Gender and Sexuality in Asia and the Pacific*, 20, 2009 [<http://intersections.anu.edu.au/issue20/nagaike.htm>] [最終アクセス 2013年10月10日]
- エーラー、セバスティアン (Sebastian Oehler) 「グラフィック・ノベルって何? ——ドイツと世界のコミック作品概観」(<http://www.goethe.de/kue/lit/prj/com/ccs/csz/ja5711244.htm>) [最終アクセス2013年10月10日]
- 大城房美「少女マンガと「西洋」——少女マンガにおける「日本」の不在と西洋的イメージの氾濫について」、筑波大学文化批評研究会編『〈翻訳〉の圈域——文化・植民地・アイデンティティ』イセブ、2004年、525—554ページ
- Randle, Chris, "The Jillian Tamaki Interview," *The Comics Journal*, July, 2011

- (<http://www.tcj.com/the-jillian-tamaki-interview/>) [最終アクセス2013年10月10日]
- Royal, Derek Parker, "Introduction: Coloring America: Multi-Ethnic Engagements with Graphic Narrative Author(s)," *MELUS*, 32(3), 2007, pp. 7-22.
- Saltman, Judith, "Review *Skim*" (http://www.quillandquire.com/books_youth/review.cfm?review_id=5989) [最終アクセス2013年10月10日]
- Shohat, Ella, "Stereotype, Representation, and the Question of the Real: Some Methodological Proposals," in Yasuko Takezawa, ed., *Racial Representations in Asia*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2011, pp. 20-31.
- Takamori, Ayako, "The Cute Savage: Global Afterlives and Semiotics of American Racism," Paper delivered at the 3rd *Mechademia Conference on Anima, Manga and Media Theory from Japan*, Dongguk University Seoul, November 29, 2012 (unpublished).
- Tamaki, Jillian, "Skim News" (<http://blog.jilliantamaki.com/category/skim/page/2/>) [最終アクセス2013年10月10日]
- Wikipedia, "Dramacon" (<http://en.wikipedia.org/wiki/Dramacon>) [最終アクセス2013年10月10日]
- Zhao, Shan Mu (Shannon) "Claiming America Panel by Panel: Popular Culture in Asian American Comics," Paper 4393 (<http://digitalcommons.mcmaster.ca/etdsearch/available/4393>) [最終アクセス2013年10月10日]

・マンガ作品

- ペクダル、アリソン『ファン・ホーム——ある家族の悲喜劇』椎名ゆかり訳、小学館集英社プロダクション、2011年
- Chao, Fred, *Johnny Hiro: Half Asian, All Hero*, AdHouse Books, 2009.
- Chmakova, Svetlana, *Dramacon*, 3, Tokyopop, 2005-07. (スヴェトラナ・クマコヴァ『ドラマコン』eBookJapan、2006年；ソフトバンククリエイティブ、2009年)
- かわぐちかいじ『イーグル』(「ビッグコミックス」1998—2001年連載)全11巻、小学館、1998—2001年(英語訳：*Eagle: The Making of an Asian-American President*, 5 volumes, Viz Media, 1997-2001)
- 小島アジコ『となりの801ちゃん』(Next comics)、宙出版、2006年
- 大友克洋『AKIRA』(「週刊ヤングマガジン」1982—90年連載)全6巻(KC deluxe)、講談社、1984—93年(英語訳：*AKIRA*, 6 volumes, Dark Horse, 2000-02)

- スファール、ジョアン (Joan Sfar)『星の王子さま (バンド・デシネ版)』池澤夏樹訳、サンクチュアリ出版、2011年
- 白井弓子『天顯祭』(Sanctuary books. New comics)、サンクチュアリ出版、2008年
- Tamaki Jillian, *Gilded Lilies: Comics & Drawings*, Conundrum Press, 2009 (no pagination).
- (<http://jilliantamaki.com>) [最終アクセス2013年10月10日]
- Tamaki, Jillian (art) and Tamaki, Mariko (script), *SKIM*, Groundwood Books, 2008. タマキ、ジュリアン&マリコ・タマキ『ガール GIRL』谷下孝訳(Sanctuary books New comics)、サンクチュアリ出版、2009年
- トミー・ネ、エードリアン・トミン, Adrian『SLEEPWALK AND OTHER STORIES』山田祐史訳、プレスピップギャラリー、2003年
- 浦沢直樹『BILLY BAT』(「モーニング」2008年—連載)、講談社、刊行継続中

【編著者略歴】

大城房美 (おおぎ・ふさみ)

筑紫女学園大学文学部教授

専攻は比較文化・文学、女性学、アメリカ文学・文化

共編著に『マンガは越境する!』(世界思想社)、"Women's Manga Beyond Japan: Contemporary Comics as Cultural Crossroads in Asia" (*International Journal of Comic Art* 2011 Fall, Vol.13, No.2) など

・好きなマンガ・コミックス：*Understanding Comics* を読んでコミックス・スタディーズに目
覚めました

じょせい けんきゅう
女性マンガ研究 欧米・日本・アジアをつなぐ MANGA

発行———2015年6月13日 第1刷

定価———2000円+税

編著者———大城房美

発行者———矢野恵二

発行所———株式会社青弓社

〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-3-4

電話 03-3265-8548 (代)

<http://www.seikyusha.co.jp>

印刷所———三松堂

製本所———三松堂

©2015

ISBN978-4-7872-3386-8 C0036